

ポルフィロゲニトス考

——13世紀後半の事例——

平野智洋（女子美術大学）

ポルフィロゲニトスー「緋室生まれの皇子」(πορφυρογέννητος, porphyrogennitos)という称号は皇帝由来の称号として、皇帝及び皇族のみに付せられる尊称であった。特にマケドニア朝以降、宮殿で生誕した現帝の子女達はその血統の高貴さを誇る意味合いで用いられたが、皇帝権そのものとの繋がりは時代を経るに従い薄くなり、そして次第に実質性を伴わない単純な尊称に過ぎないものと見なされるようになったと考えられている(Dagron, 1994)。ビザンツ帝国に於いては多数の爵位・官職称号が創設され、時代の推移や帝国を取り巻く諸事情によってその性格が変化した。その多くは、新設の爵位官職の創設・登場による、既存のものへの価値下落と特徴づけられる。ポルフィロゲニトスもまた、上記の描写を見る限りではその一例と見なされ得る。しかし、ポルフィロゲニトス称号保有者は時代によってその員数に差異が認められ、また帝位継承などの政治的状況に於いて一定の役割を果たしてもおり、その地位は決して一概に軽視し得るものではないと思われる。

本報告ではこうした状況を踏まえて、パレオロゴス朝初期の13世紀後半に活動した、コンスタンディノス・パレオロゴス・ポルフィロゲニトス(Κωνσταντῖνος Παλαιολόγος Πορφυρογέννητος - Konstantinos Palaiologos Porphyrogennitos, 1306没)に焦点を当て、ポルフィロゲニトス称号保有者の地位や政治的な役割について考察する。コンスタンディノスはミハイル8世パレオロゴス帝(r. 1259-1282)の皇子としてコンスタンティノーブル宮殿に生まれ、ポルフィロゲニトス以外のいかなる称号をも保有する事はなかった。専制公(δεσπότης, despotis)など既存の爵位称号を持たなかった彼は、ある意味でビザンツ宮廷の身分体系に於いて特異な地位を有していたといえる。その為、後に篡奪者ヨアニス6世カンダクジノス帝(r. 1347-1354)が長子マテオス(r. 1353-1357)に帝権を分与する際の前例として捉えられるまでに至った。この事は、ポルフィロゲニトス称号が他の皇帝由来称号とは異なり、この時代に於いてもなお帝権への請求権を含み、残していた事を示唆させる。実際にミハイル8世はいかなる意図でコンスタンディノスの地位をこの様に定めたのか、そしてその結果、ポルフィロゲニトスの扱いはどのような影響を受けたのかを、同時代史料、ゲオルギオス・パヒメリス『歴史叙述』、ニキフォロス・グリゴラス『ローマ史』、ヨアニス・カンダクジノス帝『歴史書四巻』等の記述を基に追跡し、同称号の、皇帝権との関わりと政治的役割についての考察を試みる。